

# きびのさと

NO.74  
月刊

昭和九年八月一日発行 (非志子)  
岡山県都窪郡吉備町東町三五字地方時憲四三七  
吉備親老協会  
第六十二号巻々

第廿一巻 神社誌

須佐之男神社 (その二)  
石打籠の銘に

- 一、疫病神社 享保十八癸巳年 願主(不明) 奉獻燭
- 一、奉獻燭 享保五癸子歲 九月吉日 下撫川 雄波大兵衛

拜殿には「須佐之男神社」の扁額があり、間口九米、奥行四米。幣殿は中二九〇粒、長さ五九五粒にして拜殿に連接して、本殿は正面五六七粒、横面七二三粒の石の大きさを築き、周囲に玉垣をめぐらし、その中央に高さ六四粒、正面二四八粒、横面二二三粒の台座の上に、一向四面の流造本五葺屋根、勾欄付の優美な建物であつたが、昭和三十一年八月八日の未明、子供の花と遊ぶにやうな火を架して灰燼に帰せしめたことは惜むべき出来事であつた。いまは假の小宮を安置してゐる。

### △

本殿の東南隅に末社「稲荷宮」の小社がある。石打籠の銘に「稲荷社 奉獻燭 享保十一丙午年九月吉日 總氏子中し」とある。この社の北に直径六〇粒の井戸がある。建碑に「明治四十五年五月 井戸地主 安藤岩二郎 安藤信工門 立語人 岡本今造 掘人 安藤俊造」の文字が彫られてゐる。

境内は横二一米、縦五六米、その縦面積一七六平方米である。周囲は田圃より一米ばかり高く、総石がきにして中九〇粒の低いお寺となつてゐる。これは昔お塚をめぐらして、いたことを思はせるものである。神域は老松が繁茂し社殿を覆ひ、神々しかつたが昔年、松喰虫に犯されて数ヶ株枯死し伐採されたので昔日の感はない。

当社では毎年七月には茅の鞠くぐりの夏まつりがある。昔からこの地方の住民が参拝して社前に設けられてゐる大きな茅の鞠をくぐり、その茅を引き抜く持ち帰り小さな習慣がある。

この行事の起りをたづねると、往昔スサノオノミコトが旅せられて或る富豪の家に一夜の宿を求められた友断られたことを知つた貧しい農家がミコトを招いて泊めたので、

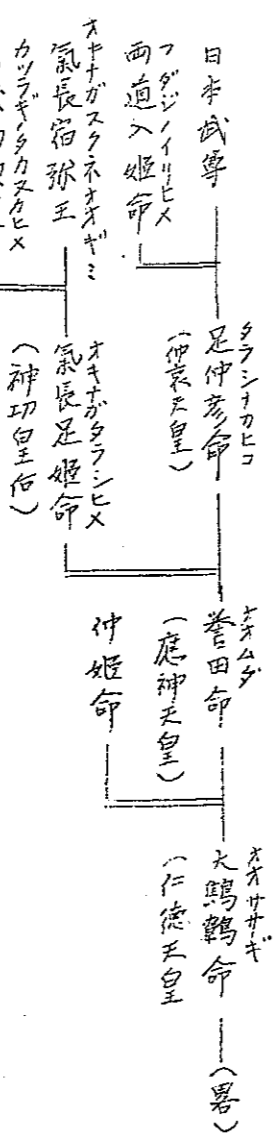
大いに喜ばれ「この地方に疫病が流行しないために大きな茅を鞠をつくり、これをくぐればその災厄が免れる」と教えられたという傳説ならきたのである。

### ○

中撫川の新屋敷の地内にある。須佐之男神社から東南約一町ほどの處に鎮座してゐる。この宮も旧撫川町分一陳納所、大内田一の産土神にして、日蓮宗信奉者の尊崇する神社である。創建は須佐之男神社と同じく不明なるも、奉納の灯籠の銘に正徳五年(一七一五)とあるをみれば、その時代の創建と想像せられる。正徳年間には撫川初代領主大川玄蕃達富の世代にして、須佐之男神社よりも数年早く建立されたものと考えられる。

祭神は九州の宇佐八幡宮と同じく仲哀、鹿神、神功皇后の三柱を祭祀するもので、武家の守護神として崇敬するものである。

祭神の系統 (日本書紀による)



南面した石葺表には扁額が失われ、これは墜落し破損したまゝである。石葺表の傍の奉獻の石柱に「昭和十八年十二月吉日 京城 大田佳時」とある。石葺表の左右に石の玉垣がある。その支柱毎に左の寄進者の氏名が刻んである。

- |     |            |   |                |
|-----|------------|---|----------------|
| 右から | 奉寄進中撫川長十郎  | 同 | 長大夫            |
| 同   | 佐吉 弥八      | 同 | 三次郎 久吉         |
| 同   | 大田安兵衛 六右工門 | 同 | 久左工門 宇三郎       |
| 同   | 六三郎 多助     | 同 | 中撫川 依兵衛 俣野庄右工門 |
| 同   | 福居 源吉      | 同 | 手吉 新吉          |
| 同   | 福居 喜三右工門   | 同 | 嘉右工門 清吉        |
| 同   | 徳右工門 喜四郎   | 同 | 和介             |
|     |            | 同 | 善吉 佐藤順蔵        |
|     |            | 同 | 善吉 金次郎         |
|     |            | 同 | 下撫川 文左工門       |
|     |            | 同 | 勘助 庄五郎         |
|     |            | 同 | 興平次 傳吉         |
|     |            | 同 | 要蔵 安五郎         |
|     |            | 同 | 赤木三吉 甚吉        |
|     |            | 同 | 吉田孝蔵           |

在諸人中 燕川 清兵衛 中島 和吉  
 福居 善左工門 千燕川 和吉  
 平七助 多五郎  
 石華表の左から  
 幸寄進 横田正三郎 盛貞  
 在諸人 中尾屋 喜助 妹尾屋 善藏  
 川入屋 吉藏 新町 金右工門  
 口口屋 柘之助 定杭 角常  
 (不明) 丸川 茂市  
 佐藤要助  
 川入屋 惣助  
 長五郎  
 中尾屋 助五郎  
 永島屋 文三郎  
 新田屋 八十八  
 中渡屋 多喜治  
 久米屋 春吉  
 の不也 善兵衛  
 花尻 也 友吉  
 定杭 あらき 也 長右工門  
 定渡 屋 利兵衛  
 佐伯屋 岩藏  
 佐伯屋 嘉助  
 幸田氏  
 同見付 屋 善四郎

同中きや吉助  
 幸寄進 中尾屋 源八  
 新町 金左工門  
 同 家根屋 定右工門  
 同 初三郎 音吉  
 同 甚六 多吉  
 同 年左工門 吉三郎  
 大橋町 川入屋 伊蔵  
 同 神蔵屋 松之助  
 同 山田屋 善代八  
 同 今出屋 儀助  
 同 幸屋 里栄  
 同 中村屋 三五郎  
 同 現金屋 半右工門  
 同 大工 龜太郎  
 同 大工 増五郎  
 同 大工 屋 安三郎  
 同 山田屋 文吉  
 同 清兵衛 岩吉  
 同 大工 惣十郎  
 同 大工 惣十郎  
 幸寄進 久米屋 伊助  
 (一以上)

同地利米以調之  
 右同断(一本) 角常右工門  
 定杭 大田三造  
 佐伯屋 藤吉郎 喜助  
 芳野屋 孫助  
 西向屋 孫右衛門  
 幸寄進 下梅川 東 新町氏子中  
 幸寄進 大田多治郎 (一以上)  
 寄進者中の一、二の人物の死没年  
 月から推測してこの瑞籬は文政の  
 末期か、或は天保の初年頃の建立  
 と思はれる。また華表脇の玉垣も  
 同年代である。  
 宮の東北隅に末社として妙見  
 を祀る小祠がある。  
 当社には創建以来百有余年を経過  
 して、創設の敷回に亘つて社殿の  
 管轄が行われたのである。ことに常  
 識上想像されるが、これに關しての  
 文獻もなく知る由もないが、明治  
 以後は十五年、四十年、昭和に至  
 りて十一年の三回に大改築  
 がなされてゐる。これは拜殿に奉  
 納の懸額によつて窺ふことが出来  
 るのである。

△ 参道の右側に鐘樓堂がある。  
 この釣鐘も須佐之男神社の神鐘  
 と共に大東亞戦争に徴せられた  
 が、昭和三十一年十一月四日に  
 同じく氏子の浄財によつて再興  
 奉懸せられたもので、同前年  
 法のものである。(西氏子の寄  
 進額は総額四拾参萬余圓に達し  
 たといふ)  
 境内は横二十米、縦七十米  
 総面積は約一五四〇平方米である。  
 境内は田圃より一米ばかり高く  
 土盛りになつてゐる。神域は老  
 松が數十株、緑葉の枝を交えて  
 いる。  
 △ 拜殿は向拜付に於て前口六米  
 奥行三米。長さ三八五浬の幣殿  
 によつて本殿に連なつてゐる。  
 本殿は横七一五浬、縦六二四浬  
 ・高さ七五浬の石がきを築き、  
 二心を基礎として周囲に石の端  
 籬をめぐらしてゐる。  
 本殿の構造は日吉造り本檜皮葺  
 屋根であるが、近年損傷甚だし  
 く一部トタン張しにて緊急處



戸義公の淘汰の達示をみると、「無知無下の愚僧のみにて法外の営み仕る僧共は、俗と  
も知らず、民を迷はし（中書）風俗の福と成り候に付、無益の心業とも今度御察察を  
遂げられ、破却仰付けらるる者なり。佛法相續御村の人民滅罪の為め、其謂へ申すれ  
此有と寺、今之を立て置かるるに就き、右破却寺の隙地を其寺々相應に増し下され、右  
の檀那共々相残る寺々へ悉く仰付けらるる者なり」とあり。

当時の寺僧は甚だしく墜落し、目にあまる行為があつたことゝ窺はれる。社寺の淘汰  
されたものは併せて三〇〇六ヶ所の文獻が遺されてゐる。  
いふが元つて備前をみると池田老政は神社に對し俗に荒神と稱し、山伏巫子などの徒が  
これを利用して疫病災難狐狸の祟りなど種々な妖言を流布し、愚民をまどかし、迷信の  
樂害がその極に達する有様であつたので、敬神の真儀を明確にせんがために寛文七年二  
月に領内の由緒正し、神社六〇一ヶ所を存置して不純の疑のある神社、紛はし、小祠は  
悉くこれを整理した。即ち小社一〇五二九社を廢して各郡代官の七六ヶ所へ各社を連立  
して郡内の廢祠をこれに合祀して寄宮へよせみやと稱した。その内最も有名なのは上  
道郡大野の芥子山へからしやまの寄宮である。その数は一〇一三〇社の多きに達し  
た。下つて正徳二年にも綱政（老政の子）時代に更に六六社を合祀した。また寺院に對  
しては當時の僧侶の墮落腐敗は甚だしく到底民を教化する資格がないことを憐れ、英  
断を以つて大淘汰を実行した。文獻によると、寺院數一〇四ヶ寺。僧侶の退轉、追放  
、還俗は一九五七人に及んだ。内二五〇ヶ寺、僧二六二人は天台、または真言宗に歸  
せり。他の地は日蓮宗に屬し断然多く、領民の思想信仰精神に關して、前後五十餘年に亘つて  
敢行し根本的改造に努めた。この淘汰は全く破戒僧を懲らしめ、真に信仰の復活を  
目的としたのである。惜むらくは庭瀬藩における社寺統合に關する古文書は見当らな  
小藩のため実行しなかつたか、正確なことは詠述したが、東花尻の妙傳寺、立成寺  
などは備前領から追放されて、ここに轉轉面興されたものといわれ、  
天神社

東花尻の里の前の山腹に鎮座する東花尻分の氏神である。花尻街道から急斜面に設けら  
れ、その礎道を踏んで昇り神門を潜ると拝殿の前に出る。南面した拝殿は白拝付入母屋  
造瓦葺にして五米四面の建物である。本殿は勾欄付にして方一八六程、流造本瓦葺屋根  
にして、更に周囲に石の玉垣をめぐらし、本殿の東側に二八七程四方の建物がある。  
。参詣者の休憩所であるが、甚だしく腐朽してゐる。拝殿の左側に接して鐘樓堂があ  
る。この神鐘は大東亜戦争に供出し鐘樓堂のみ寂しく姿を保つてゐたが、昭和二十九年

の四月に氏子の寄進によつて再鑄されたものである。

神鐘は藤頭まで結太一本、下部の口内徑五三程、緑は八程である。その銘に  
「備後國新市町 高野鑄造所作 天滿天神宮 五穀豐穰氏子繁榮 天下恭平國土安穩  
都窪郡吉備町大字東花尻 昭和二十九年 甲午年四月再鑄

氏子總代 森安夫一 森安金八 板野信治 中村京次郎 森安朝清 板野 茂しの  
名を刻み、在諸人寄進者の氏名を列記してゐる。  
本社創建に關して穿鑿した参考資料は存にもないが、古老の口碑に從へば、昔備  
前領の尾上の一ヶ所に菅原直良公を祭祀してゐた小宮を東花尻村氏の願によつて現地に  
勧請したといわれ、もとは小さな祠に過ぎなかつたが新しく社殿を造営し、女神として  
尊信するに至つたといふ。

尾上の宮跡はいまの妙見堂のある東側にして歴然とした礎石が残りてゐる。この小丘  
と俗に天神山といふはその名残り止めである。  
本社の背後の頂上は前方後円式の大石壇（第一輯古墳篇参照）にして、一千年をさか  
のぼる我國古墳時代の遺物である。この大石壇の中腹に天神宮を祭祀してゐるので、俗  
に天神山の古壇と呼稱してゐるが、もとより神社と古壇とはなにかかたりもない。  
石がき、玉垣などになにも金石文うらし、ものが見当らない。ただ本殿に天満宮の扁額  
が懸けられてゐる。思ふに遷祀したときは天満宮と尊稱してゐたものうらし、中興天神  
社に改めたようである。他の神社のように玉垣の支柱に寄進者の氏名が列挙してゐない  
のは珍らしい。これは氏子中に荒名納のところがなく、貧富の差こそあれ惣分の淨財を  
もつて修造されてゐることに窺われる。

八幡神社

大田の山中に鎮座する部落の氏神である。公民館の脇から徑路を辿ると、二百米ほ  
ど社前に出る。社殿は南向にして祭神は云々までもなく菅原別命外二柱を奉斎してゐ  
る。葺表をくぐると西側に石灯籠がある。銘に  
「天明四甲辰 八月吉日 八幡宮 願主 荒井川虎蔵 母し、とある。  
（虎蔵の墓標は向庵にある。墓碑には荒井實蔵とある。同一人にしてこの歟歟した歳の  
翌年に寅歳は没してゐるので、母に先立つてこの世を去つたものと思はれる）  
また社頭の石柱には  
「嘉永七甲寅年 八月吉日 奉寄附 公森氏し。（公森猶太郎の先祖である）  
右手に自然石を加工した手水鉢の銘に 「奉寄附 宗曆八天（不明）惣氏子中し、

の刻字がみられる。下部は土中に深く埋れて読めがたい。多分ほかの場所から運ばれてここに置かれたものである。社殿の西側の唐獅子の銘に「天保十三壬寅八月吉日立奉獻氏子中」  
左に「御神」の刻字がある。拝殿は五五五種四面にして、本殿は折れ、建物である。右に鐘楼がある。梅鉢は桂川領主戸川氏の定紋にして、戸川氏の再建にかかるといわれる。高き五五五種、横一〇七種、厚さ二五種、重さ二五種、大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」

御神神社  
小西地内にある。拝殿は五五五種四面にして、本殿は折れ、建物である。右に鐘楼がある。梅鉢は桂川領主戸川氏の定紋にして、戸川氏の再建にかかるといわれる。高き五五五種、横一〇七種、厚さ二五種、重さ二五種、大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」

大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」

大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」  
大賀健命後裔の御神に「御神神社」の五字を大書し、裏面に少く「大正六年建之 大賀健命後裔」

### 荒神宮

西前庭の飛谷と、田圃のなかにある。一祠にして、四五種四面の流造りの屋根は破損してトタン葺に修理せられた。この宮は昔から西花尻部路の天台宗信徒のみが祭祀して、その中で、中組の吉井直樹が社人ととなり、毎年春秋二季にはささやかな祭りが行われていた。いつ時代にも創始されたが、またその由来もわからず、天台宗は平安朝の初期に傳教大師（最澄）が開創した宗教だけに世の新しい宗教徒が祭る荒神よりも古いものでないかと思われ。天台宗は始め奈良六宗（六宗とは三論、法相、法華、華嚴、律、俱舍、成実）に由来し、ついでに、宗といつても今日の日蓮宗ではなく、仏教の教義を研究して、其の分争の創建や東大寺の六佛建立は、そのほか国家鎮護の祈禱を行つた。諸國にたつた回中園から渡来し、七四〇年に律が伝わつた。その終りである。六宗は最初は六二五年に三論がカルたのである。余談であるが、律宗を傳えたのは中園（唐代）の鑑真である。鑑真は没するに十一年間、五回も失敗しついに失明した。初志をまげず、六回目には漸く宿望をはたして、天平勝安五年の正月に入京した。我國の佛教と文化の発展に貢献した高僧で、奈良の唐招提寺を開基している。（おれり）

### 高級干麩

### 郷土の名産

### 吉備の桜

### 赤木製麩所

静窪郡吉備町下撫川

吉備局電172番

### 矢尾齒科医院

吉備町本町

吉備局電 有線四〇五番 一七番